

## 論文の内容の要旨

論文題目                    サミュエル・ベケットと未成熟性の問題

氏     名                    杉本 文四郎

本論文は、サミュエル・ベケット (Samuel Beckett) (一九〇六～一九八九年) がみずからの特異な存在感覚に動機付けられ作品の中で未成熟性にまつわるモチーフを駆使したことを示し、そのことが独自の創作の発展に貢献したと論じる。本論文は序論と四つの章および結論で構成され、序論では論点の導入、「未成熟性」という中心概念の定義、主題文と手法の提示をおこなう。第一章から第三章では一九三〇年代の作品を集中的に扱い、第四章では戦後の散文を扱う。このような構成によって、ベケットが創作活動の初期段階から未成熟性のモチーフをさまざまに変奏して利用したこと、しかもそれが独自の創作を探求する試みと結びついていたこと、その探究が戦後も継続し『事の次第』(フランス語版一九六一年、英語版一九六四年) に結実したことを論証する。

以下、各章の要旨を記す。

序論。まず、ベケットが内なる未成熟な存在を常にかけていたということを示す複数の証言が提示され、続いて、本論文における「未成熟性」の概念の定義づけを試みるべく複数の論点が導入される。十九世紀以降のヨーロッパ文学において子供の神話的特性が重要視された一方で、ベケットの作品には子供への嫌悪、生殖への嫌悪が指摘されている。子供の存在よりは子供の不在や形骸性が意味を帯び、子供の未成熟性よりは青年や独身男性の未成

熟性が前面に出ている。ベケットにおけるこのような未成熟性を分析するには、美的教育・自己形成・国家形成の問題の結節点に位置する「教養 (*Bildung*)」の概念に加え、教養小説の歴史的変容についての理論が有益である。ポーランドの作家ヴィトルド・ゴンブローヴィチの「未成熟性」の概念もまた重要な補助線となる。ドゥルーズがベケット作品の主体を「幼生の主体 (*sujets larvaires*)」と表現したことと関連して、「イマーゴ／成虫 (*imago*)」に対する幼生の視点が初期の詩「マラコーダ」(一九三三年執筆、一九三五年出版)から戦後の散文『伴侶』(英語版一九七九年、フランス語版一九八〇年)にまで見られることが指摘される。

序論では最後に(1)ベケットにおける「未成熟性」が定義されたうえで、本論文の(2)主題文と(3)手法が示される。(1)ベケットにおける「未成熟性」は子供に特有な未熟さではなく、青年が十八世紀以来のブルジョア市民社会を構成する理想的市民になれないという未熟さであり、同時に、言語や理性の使用などに係る普遍的な未熟さでもある。(2)ベケットは内なる「あの閉じ込められた哀れな胎児 (*that enclosed poor embryo*)」への義務として創作を捉えていた。未成熟性のモチーフの利用はジョイスとは異なる独自の創作の探究に寄与し、その試みは『事の次第』において「永遠に幼生であること (*l'éternel larvaire*)」から得られる「言葉とリズムとあえぎ (*les termes, les rythmes, les halètements*)」として実を結んだ。(3)本論文はベケット作品の精読とインターテクスト的分析を手法として用いる。

第一章「ベケットのモダニスト教養小説——『並には勝る女たちの夢』論」。ベケットの最初の長編小説『並には勝る女たちの夢』(一九三二年執筆、一九九二年出版)は、作者の芸術家としての自己形成の旅の経験を多分に反映し、作者の後の創作美学を予示しているという点で、「教養」の観点から論じられなくもない。しかし、ゲーテへの言及を子細に検討すると、ゲーテ的な成長 (*Bildung*) の観念への痛烈なアイロニーが見いだされる。『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』(一八二一年)への言及とワーズワスの詩の引用が脱文脈化されて組み合わせられることで、ゲーテ的な成長の観念とワーズワス的な成長の観念が共に疑問視される。このような「文学的先行者への依拠と反抗 (*dependence on and opposition to its literary predecessors*)」(Patrick Bixby)は、一九三〇年代にゲーテに触発されて書かれた二つの詩にも窺える。分裂した自我を持ち、いつまでも社会に馴染めない未成熟な主人公を描くこの小説は、モダニスト教養小説としてだけでなく、「阻害された成長を描く一九三〇年代以降の小説の系譜 (*genealogy of post-1930s novels of arrested development*)」(Jed Esty)の嚆矢としても位置づけられるのではないか。

第二章『『マーフィー』、ゴンブローヴィチ、未成熟性の詩学』は、ベケットの小説『マーフィー』(一九三八年)とゴンブローヴィチの『フェルディドゥルケ』(一九三七年)を比較するジャン・ミシェル・ラバテの論文が残した課題に取り組む。ラバテが論じていないゴンブローヴィチの戦後の小説『コスモス』(一九六五年)を比較対象とすることで、『マーフィー』の形式批判という主題が浮き彫りになる。

まずは予備的な考察として、ゴンブローヴィチの重要性、未成熟な青年を描く文学の系譜におけるゴンブローヴィチの位置づけ、ベケットとゴンブローヴィチの親近性、ゴンブローヴィチの未成熟性の詩学を検討する。そのうえで、マーフィーの精神の描写はモダニスト的な書法が過剰化されたパロディであり、マーフィーの精神の危機はモダニスト的な戦略では語り得ないものがあることを示唆していると論じる。『コスモス』との比較によりこの主張が支持される。同時に、ベケットとゴンブローヴィチの同質性と差異が明らかとなる。

第一章と第二章は、青年がブルジョア市民社会を構成する理想的市民になれないという意味での未成熟性の問題に焦点を当てている。それに対して、第三章と第四章はより普遍的な未成熟性の問題に目を向ける。

第三章「理性の未成年状態へのまなざし——『人間の望み』論」は、ベケットがサミュエル・ジョンソンについての調査に基づいて執筆し途中で放棄した戯曲『人間の望み』（一九三七年以降執筆、一九四一年には放棄、一九八〇年出版）に、「知れば知るほどできるようになる」ジョイスの創作法とは異なる、ベケット独自の無知（ignorance）の美学の萌芽が見出せるということを論じる。『人間の望み』と無知の美学とのつながりを示す証拠として、第一に、ベケットは調査の過程で得た知識を執筆過程において意図的にそぎ落としたということ、第二に、『人間の望み』には言葉の機能不全や理性の失調が繰り返し描かれるということが示される。

ベケットのジョンソン受容は個人的感情を伴うものであり、ヴァージニア・ウルフやT・S・エリオットのような他のモダニズム作家のそれとは異質であった。『人間の望み』の梗概が示され、沈黙、言葉の機能不全、理性の失調が繰り返し描かれていることが指摘される。『ラセラス』（一七五九年）や「人間の望みの虚しさ」（一七四九年）に窺えるように、ジョンソンもまた理性の限界を認識していた。ベケットがジョンソンのこのような側面に惹かれたことは、『ラセラス』の「絶え間ない放心に襲われる憂鬱な状態でぼんやり坐っている（Sit stupid in the gloom of perpetual vacancy）」というフレーズをノートに書き留め、みずからの憂鬱状態と重ねて一九三五年七月九日付の友人アーランド・アッシャー宛ての手紙で引用したことが如実に物語っている。ベケットとジョンソンは理性を適切に使用できないカント的な「未成年の状態（Unmündigkeit）」へのまなざしを共有していたのではないか。

第四章「幼生の語り、「幼生の主体」——『事の次第』と未成熟性の問題」。ベケットは一九四八年八月十二日付けのジョルジュ・デュテュイ宛ての手紙で、目指すべき「言葉とリズムとあえぎ」は「永遠に幼生であること」から得られると書いている。本章はこの目標が『事の次第』において最も追求されたと論じる。同作の執筆過程においてベケットは統語的・句読法的な分節化を取り消し、言語的構築物としての作品を意図的に幼生的な段階に戻す戦略を他のどの作品よりも徹底した。それだけでなく、物語の始まりを説明するキー・フレーズを反復することで、物語の起源に繰り返し立ち戻りながら少しずつ進むという、昆虫の幼生の蠕動運動にも比せられる語りを創造した。

語り手の非人間的な存在への退行は、ヘッケルへの言及を介して、子宮の中の状態、つまり

人間の幼生状態への回帰と重なる。マルブランシュの言及を含むエピソードにおいては、人間が動物とは異なる高等な自由意志を持っているという考えに疑問符が付される。このような『事の次第』における未成熟な主体は、ドゥルーズの言う「幼生の主体」と比較可能である。

『事の次第』の語りは、語り手が quaqu 聞こえる声を聞いた通りに話したものであるとされる。上記の論点に加えて、この声が「わたしたちみんなの声 (the voice of us all)」と呼ばれることから窺えるように、『事の次第』は生物種としての人類を主題とするものであって、個人の意識を主題とする『名づけえぬもの』(フランス語版一九五三年、英語版一九五八年)の延長線上にあるものではない。人間の非人間への退行が描かれる『事の次第』は、二十世紀の二度の大戦で人間の未成熟性が露呈し、啓蒙への信頼が失墜し、人間主義の基盤が揺らいだことと決して無縁ではない。

結論は、各章の独自性と相互関連を強調しつつ、これまでの内容をまとめて結びとしている。ベケットは、産まれる前に未発達なまま殺された内なる存在を常を感じ、それに対して創作上の義務を負っていた。それゆえ、一九三〇年代という執筆活動の初期段階から、子供に特有のものではない普遍的な未成熟性の問題を探究した。この探究は戦後まで持続し、生物としての人間に本質的な未熟さを類まれな想像力と語りによって表現する『事の次第』において到達を見たのではないか。